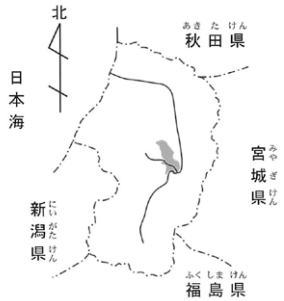
結髪土偶のふるさと

大宮 富善
寒河江市教育委員会 生涯学習課歴史文化専門員

1.寒河江市の位置

地図上での山形県の形は、日本海の飛島を見上げる人の顔に例えられるが、寒河江市の位置と形はその耳部のあたりといえる。地勢上、寒河江市は最上川中流に位置し、山形盆地の中部西縁からその西側の山地にかけて広がっている。最上川と最上川の支流である寒河江川に沿った台地・低地に中心市街地があり、市域の大部分は市街地の北西側の葉山山地の南斜面となっている。



山形県と寒河江の位置

2.寒河江市の文化財

平成30年末段階での寒河江市の指定文化財は、国が8件で数として33、県が39件87、市が150件299、合計197件419である。このうち国の重要文化財指定になっているものはすべて慈恩寺に関するものである。なかでも彫刻5件30体というのが特徴的で、いずれも古代・中世にさかのぼるものである。

以下に、慈恩寺の文化財を中心に紹介する。建造物の部の慈恩寺本堂は、江戸初期の元和4年(1618)に建てられたもので400年を過ぎた。昭和25年に重要文化財に指定。彫刻の部の本尊五仏は、主尊の弥勒菩薩、釈迦如来(下右)、地蔵菩薩(下左)、不動明王(上右)、降三世明王(上左)である。鎌倉時代の永仁6年(1298)に慈恩寺現地で造られた。平成元年に国重要文化財に指定。弥勒を胎蔵界大日如来になぞらえたものか、大日(弥勒)と不動明王・降三世明王が密教の尊像で、釈迦・地蔵・弥勒は、過去仏・現在仏・未来仏を表す顕教(経典に書かれた教え)を仏像に現したものと考えられている。鎌倉期の慈恩寺では密教と顕教が信仰されていたという証拠である。

慈恩寺本尊五仏

次の釈迦如来像は、もと国重文指定名称が木造阿弥陀如来坐像であったが名称変更になった。眷属は騎象普賢菩薩及十羅刹女像と騎獅文殊菩薩及び脇侍像で、平安後期の作である。中央の像は阿弥陀如来坐像として大正4年国宝指定、昭和25年に重要文化財に再指定になった。釈迦がインドの霊鷲山で法華経を説いた姿を仏像彫刻群に現したもの

と言われ、法華彫像群とも呼ばれている。

次は薬師三尊像で、中央が薬師如来坐像、右が日光菩薩立像、左が月光菩薩立像である。胎内に紀年銘があり、鎌倉時代後期の延慶3年（1310）に京仏師の院保の工房が造ったことが分かっている。平成7年に重文に指定。その眷属が十二神将で、鎌倉後期の作、薬師三尊像より古い作と言われている。平成2年に重文指定。

慈恩寺薬師三尊像

重要無形民俗文化財の慈恩寺舞楽は、林家舞楽の内ということで昭和56年に指定。現在、祭礼は5月5日であるが、かつては旧暦4月8日の一切経会で舞われたものである。慈恩寺一切経の一部は、隣の宮城県名取新宮寺に残っていて、重要文化財に指定されている。

慈恩寺以外の寒河江の文化財のセンターといえるところは、平塩熊野神社と寒河江八幡宮である。平塩熊野神社には、山形県指定文化財の木造伝十王坐像があり、平安時代に地元の木材で中央の仏師が彫像したもの。平安後期には既に仏教文化が寒河江一円に広がっていた証拠となる。

寒河江八幡宮には大江氏が鎌倉八幡から伝えたという県指定無形民俗文化財の流鏑馬が行われている。

ほかに高瀬山古墳が山形県指定史跡である。

高瀬山古墳

3.結髪土偶が発見された頃

山形県の考古学は庄内から始まり、明治23年（1890）奥羽人類学会が結成。会長は松森胤保（1825 ～ 1892）で、羽柴雄輔（1852 ～ 1921）宅に事務所を置き、明治34年まで98回の研究会を開催している。武士の系譜をひく知識人が、山形県の考古学を始めたのである。

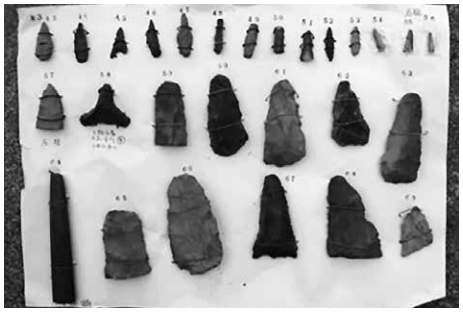
小関相之助考古資料コレクション

寒河江で初めての採集遺物は、明治30年（1897）に寒河江丑町の小関相之助が高瀬山より採集した石器である。小関は大工棟梁で、考古学の知識を有する人ではなかった。この資料は山形大学附属博物館が所蔵している。大正5年（1916）2月、小関相之助は正覚寺本堂で表功状を受けた。

菅井邑岳採集石器

住職、檀家総代が居並ぶなか、蒐集した石器が保存箱に納められて飾られている。

寒河江洲崎の菅井弥五平（邑岳）が、明治41年（1908）頃から大正10年（1921）までの10年有余年、考古資料を収集した。菅井邑岳は、平野山の蓮華文瓦破片を発見した人物である。



安達又三郎収集石器

菅井家は、代々にわたって大江氏の事績について研究を続けた。邑岳はこの地方を代表する知識人であった。邑岳は考古学に興味を持ち、出土した遺物を収集して研究に励んだ。採集したすべての資料には「収集年月日・発見場所・発見者名の寒河江町字洲崎菅井邑岳」と記入している。小さな石箆にも丁寧に墨書してあり、邑岳の考古学への情熱が伝わって来る。明治41年を初めとし大正10年までの10年有余の研究活動であったことが分かる。また自らの居宅がある洲崎や長岡山を中心に、近隣の高松村、川土居村の稲沢、柴橋村の柴橋・金谷、寒河江町長岡山・石田・六供町などを調査している。さらに広く、西山村海味・川土居村吉川（西川町）、大谷村玉ノ井（朝日町）、豊田村小塩（中山町）まで出かけた。元高松中学校長の高橋正隆は『米沢史談』に、「明治45年頃菅井邑岳が地元部落民の開墾などにより、蓮華文瓦破片を発見したのがきっかけとなり」と蓮華文瓦発見のいきさつを記している。住民から小学校へ届けられた瓦が今も残る。

高松小保管の布目瓦

郷土博物館の置かれた西村山郡会議事堂

明治43年（1910）頃から大正6年（1917）頃にかけて、寒河江の大地主・豪農の一人である六供町の安達又三郎が考古資料を収集した。平成27年（2015）、山形市に在住する子孫の方から、安達家に保管されてきた116点の考古資料が寒河江市に寄贈された。石器は台紙に一点ずつ糸で結ばれ、その下に採集年月や出土地が記入されていて資料的価値が高い。採集年が判明する石器46点のうち、39点は明治43年から大正6年のものである。これは10代安達又三郎の時代にあたる。収集石器のうち菅井邑岳が発掘した石器を購入したものもあり、他人から譲り受けた石器があることは確実である。昭和2年（1927）9月、安達又三郎は自身が収集した結髪土偶を郷土博物館に寄贈している。

大正4年（1915）西村山郡教育会が、郡会議事堂内に図書館を設置した。

大正8年（1919）史蹟名勝天然記念物保存法が制定され、山形県はこの法に基づき、史

蹟担当者に五十嵐清蔵・阿部正己を、博物担当者に安斎徹・橋本賢助を調査委員に委嘱した。

大正9年（1920）の頃、慈恩寺近村の箕輪から蕨手刀発掘。

大正10年（1921）12月、村山軽便鉄道（現JR左沢線）が長崎より寒河江まで開通。この線路施設工事で石田遺跡が大々的に掘削された。

寒河江醍醐村の軽部慈恩（1897 ～ 1970）は、大正10年から同14年まで考古資料収集。11年と12年に集中し、遺跡は現在の寒河江市内のほか東根市羽生（石棒）や朝日町雪谷（縄文土器）もある。軽部慈恩は、大正14年（1925）早稲田大学文学部国漢科を卒業し、その後、朝鮮半島に渡り教職に就いている。朝鮮公州在職時代に公州付近の古墳や山城等を研究して『考古学雑誌』に発表し、後、研究成果を『百済遺跡の研究』という大作にまとめている。

大正11年（1922）、山形県教育会の総集会で、西村山郡教育会は教育会館の建設を提案、4年後の臨時総会でその設置が議決された。

大正12年（1923）4月、郡制廃止。その後西村山郡役所は寒河江町役場となり、西村山郡会議事堂は寒河江町公会堂となった。寒河江西村山地方では大正時代からはじまった郷土教育のための郷土資料の調査機運が高まり、大正13年（1924）5月、西村山郡教育会の総集会並びに郷土博物館の開館式が挙行され、元郡会議事堂での学術講演は早稲田大学の西村真次教授が「人類の進化」の演題で行った。

西村山郡教育会発行の
考古資料絵はがき

同じく大正13年の5月、菅井邑岳の子・菅井半五郎光辰が、庄内の考古学者阿部正己を平野山に案内した。平野山出土の瓦の探索が目的だったのではないかと思われる。半五郎も親に倣って郷土史や考古学の研究に熱心だった。平野山の蓮華文瓦は多くの人々の関心を集めるなかで、昭和2年の5月、平野山古窯跡が山形県の史蹟として指定を受けて保護顕彰されることになり、「史蹟祝部土器窯址」の石碑が建てられた。

昭和2年（1927）、山形市香澄町木の実小路に山形県教育会館が建設され、その2階に郷土博物館が開館。西村山郡の郷土博物館の多数の考古資料が移された。

昭和3年（1928）に山形県郷土研究会が結成され、三浦新七が会長に就任。寒河江町の佐藤吉則は、鮭延瑞鳳（真室川）、花車円瑞（新庄）、酒井忠純（鶴岡）らとともに、この会を代表する会員の一人であった。7月9日に高松小学校で「平野山古窯址」の研究会が行われた。現地に赴き古瓦・祝部土器の窯址を視察の後、講演会が行われた。阿部正己は6月に『考古学雑誌』第14巻第9号に「羽前国西村山郡平野山古窯址」と題する論文をすぐに発表し、全国的な注目を集めた。

昭和6年(1931)は山形県の考古学にとって画期的な年となった。酒田市東部の水田にある城輪で、密接に立ち並んだ一辺25㎝前後の角材が発見された。約720mの正方形規格を持ち、各辺の中央部には八脚門を、四隅に櫓状の遺構を配置する大規模な遺跡であることが明らかになった。平野山窯跡の古代瓦発見の後である。酒田市城輪遺跡は、昭和7年(1932)に国から「史跡城輪柵跡」として指定になった。

昭和7年の高瀬山古墳発掘調査

寒河江では、同年10月15日、佐藤吉則・堀場義馨・山形県郷土研究会の五十嵐晴峯・寒河江小学校訓導の大沼長之助等により高瀬山古墳の発掘調査が行われ、翌日の10月16日、寒河江町八幡原の「ストーン・サークル」調査が行われた。佐藤吉則が寒河江中学校の歴史専攻教諭であった堀場義馨と同道しての調査がきっかけだった。

昭和8年(1933)8月、「高瀬山古墳之碑」が現地建立され、翌昭和9年(1934)11月に、「巨石文化遺跡之碑」が八幡原に建立された。

昭和19年(1944)になると戦局が急を告げ、郷土博物館が日本海軍に接収される動きが出たため、所蔵品を長井政太郎教授がいた緑町の山形師範学校の郷土室に移された。これが現在の山形大学附属博物館所蔵資料に繋がるのである。

結髪土偶が地中から顔を出したころ、郷土の考古資料は、考古学対象としてだけでなく有力者の愛好品として、また、地域に住む人々の愛国心を養うものとしてなど、さまざまに利用されてきた面があったことを指摘できる。現在、寒河江の遺跡、遺物は保存対象となり、発掘調査成果は考古学という学問に確実に寄与し、寒河江のみならず山形の歴史と文化を豊かなものにしている。

参考

寒河江市史編纂委員会『寒河江市史 環境・考古編』(2019年)寒河江市